

S-2 気仙沼市鹿折浪板地区 2011年12月29日(木)

報告者名	梅屋 潔	被調査者生年	1933年(男)
調査者名	梅屋 潔	被調査者属性	気仙沼市指定無形民俗文化財虎舞保存会会長、鹿折八幡神社氏子総代長、日渡水産社長(水産加工業)
補助調査者	相澤 卓郎		

被災時の状況

震災当時、自分は市内(市街地)にいた。工場で加工するための原料を運搬中に被災した。当時工場では16名(うち2名は実子)が働いていた。津波が来るのはわかっていたので、従業員は自宅に帰り、息子に工場の真空包装機など高価な設備をフォークリフトで避難させた。魚市場が見える裏の山(地所)に家族4人ほどで登り、海の方を見ていた。なかなか来なかったが、栈橋が見えるくらいに海水が引いたかと思ったら、1丈(約3メートル)ほどの高さの津波が襲ってきた。コンテナや船が波に流され、外洋に逃げようとした船も内湾に押し戻され、約20キロぐらいの速度でぶつかり合いながら渦を巻いていた。川沿いに遡上した波に乗せられて川の上流に流された船もあったようだ。引き波の威力は強く、家々の屋根がながされていった。内栈橋は流されて唐桑の小鯖に流れ着いたという。

伝聞で自宅にも水が入ったことを知った。当初はサッシの半分ほどと聞いていたが結局屋根まで、290センチほどまで浸水した。水はすぐ引いたので家がさほど傷まなかったのは幸いだった。自動車は4台あったが、軽トラック1台は家の中へ、乗用車(カローラ・アクシオ)は玄関の土間に入っていて、2トントラックが家の中まで流された。どうも津波は山の尾根伝いに杉林を通過して自宅に至ったらしい。

後で聞いたところでは通りから自宅に入る入り口にある須賀神社にも避難した人々があり、神社の幟を体に巻いて寒さをしのいだ人もいるという。

家は、外見こそ一部損壊であったが(判定は半壊)、内部は津波で家具が倒れ、泥まみれだった。現在では、ボランティアや親戚に清掃してもらい以前のように暮らし続けている。のべ20人のボランティアがヘド口などをかきだして清掃してくれた。

4棟あった工場はばらばらになってしまった。工場では鰹節、なまり節、イカの塩辛の下処理を行っていて、特に鰹節は評判が良かった。手を抜いていないためであろう。今年も郡山や塩竈などから、「今年のお歳暮に鰹節はないのか」という問い合わせが相次いだ。

今回の災害で中学高校の同級生が5人亡くなった。なんやかやで仕事が増えてきて、会計や長など仕事が回ってくる。出費も増えて大変だが、生きていられるのはなによりと考えて引き受けている。とりわけ会計関係の役が多い。八幡神社の氏子総代長もつとめている。

虎舞と八幡神社のトーマー(当番)、村の組織

虎舞は飯綱神社でまず奉納をして、漁で生計を立てているところを回るものだ。須賀神社は

150年ほど前から現在のかたちで崇敬されていたと聞いている。現在の別当はA（屋号は岩城）、渾名は「50番」。タクシーをやっている。飯綱神社の別当は、長浜（屋号）。名字は同じくAである。須賀神社自体は12、3軒の家の共有地であるが、ほとんどそういった意識はない。以前はカトク（家督：家に残ることが期待されている長男）だけが関わっていた。兄が出ていたころには大阪万博で演じたそうだ。前会長のB氏は芸達者だった。前前会長のC氏の代から市に無形文化財指定を働きかけていたが、なかなかうまくいかなかった。平成18年になってようやく指定された。自分が会長になったのは、前会長が退任してから何人か候補が立ったが、あまりうまくまとまらなかった。「日渡しかない」と推薦するひとがいたが、もともとはカトクでもなかったのによくわからないし、固辞していた。最後に井戸端が幹事長をして支えてくれるなら、と総会で条件を出した。井戸端が了承したので引き受けることになった。

祭礼の時の会費は1,000円だが、お札が700円で残りの300円で飲食費をまかなう。もともとは「ホウゲ」（宝桶）と呼ばれる桶に入れておにぎりなどを供したものだ。ホウゲは戦後米不足の時期に使われなくなったということだ。主立った家は8軒だが（①鳥越、②岩城、③浦島新屋、④荒屋敷、⑤日渡、⑥日渡の上、⑦高屋敷、⑧木下隣）、そのうち、鳥越、岩城、荒屋敷、日渡の4軒は原則毎回主立った役割を果たす。浦島新屋、日渡の上も準備の中心に加わることもある。岩城と荒屋敷はエンルイである。

従来は、祭典への関わり方にも序列があったが、あるとき平等にしたほうがよいと主張する村人の一人が「ホウゲ」を打ち壊した事件があった。木下隣が仲介しておさめた格好となっている。

浪板1地区は6組に分かれており、かつては3組ずつ交代で役を果たした。現在では人口流出の影響でほぼ4組ずつになっている。多い組は11軒ほどになるが少ないところは5軒しかない。

震災の時、虎の頭のニセモノは蔵にあった。それもぬれたが無事だった。ホンモノは新しい頭を製作依頼していたために八日町のD氏に預けていたので被害を免れた。現在ホンモノは芸能部長が保管している。

お年とり

神棚も無事であるので、例年に近いものはしたいと考えている。正月には七房のついたしめ縄、スカシ、（紙の）網、星の玉（ほしのだま）を7枚セット（ほかに5枚セット、3枚セットがある）になったものを天照皇大神宮の札と一緒に八幡神社から選ばれた総代役が12月1日に祓いを受けてもらってくる。星の玉は、松竹梅や万両カブなどと一緒に海老が描かれたもので、めでたいことを表す。父の代でしめ縄は自分でつくるのをやめたが、昔は自分でつくっていた。しめ縄から垂らす房は、左から7、5、3、5、5、3、5、3、3と垂らしたものだ。星の玉は市内の新城の引退した元漁師がつくっている。「開運福祿寿」のスカシは、八幡神社宮司のE氏がつくったものである。仏壇の左にしめ縄、その下には星の玉2枚、右に紙の網と御幣、下には左から星の玉3枚、大国主。右正面上には恵比寿大黒が祀られ、その下には、事代主、星の玉2枚、「大漁」「満作」「千万両」「餅」「宝船」窠神を貼る。その上にはお守りをおさめる棚があり、長磯の穂葉（あきば）神社、巖島神社、八雲神社、成田山新勝寺の札がある（家の4代目の人が成田に参ったときのものだから飾っている。現在ならともかく当時成田山に参るのは大変だったろう）。家

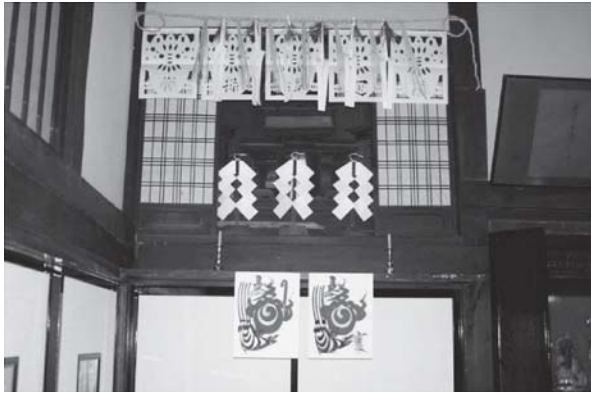


写真1 しめ縄、天照皇大神宮の神棚と御幣。下がっているのは星の玉

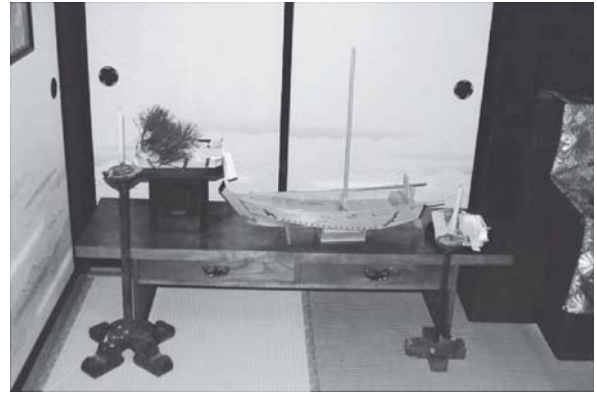


写真2 供物台と船



写真3 アミと大黒



写真4 大年神

には4つ神棚があり、それぞれ天照皇大神宮、大年神、恵比寿・大黒天が祀られている。4つめにはお札を飾っている。4つの神棚ではそれぞれ飾り付けが異なる。それぞれ飾るものは異なっていたが、御幣束とスカシは共通して飾っていた。

31日と1日は、床の間でお膳を囲む。オガミゾナエといって箕にお餅をふたつ入れて松の枝を乗せて四方拝して餅を切り、囲炉裏で焼く。供物台には、松の枝と赤と白の幣束が置かれており挨拶に来た人のお祝いをそこに置くことになっている。赤い幣束は1月12日に山に供え物とともにオハネリ（お米）を蒔いて山で拝む。1日に若水汲みをしてそれで料理の支度をする（昔は若水桶を使ったが現在はあるものを使う）。現在は行わなくなって20年以上になるが、3ヶ日はまめがらの火で竈を炊いた。4日にヤマイレ（山入れ）といい、山でオハネリを蒔いて柴刈りのまねをして松の枝を持って来る。6日はツメキリユ（爪切り湯）、7日は七草、11日は農ハダデル（はじまる）といって、農作業をはじめる日である。ヤマイレで持ってきた松の枝は、新年初めての雷の日（ハツライサマ：初雷様）にマユダマ（繭玉。1月13日から20日ぐらいまで飾る）の一部とを一緒に燃やす。20日はマユダマガユといいマユダマを降ろし、粥を食べる。昔は濡れ縁だったので、杉を切ってきて濡れ縁におき、しめ縄など正月飾りをそこにかけておいた。昔はその杉を秋に稲掛けにした。カレイ（家令）として菜っ葉は6日まで、つまり七草が過ぎるまでは食べない。肉も七草まではまず食べない。1日朝夕、2日朝夕、3日朝夕、5日朝夕、

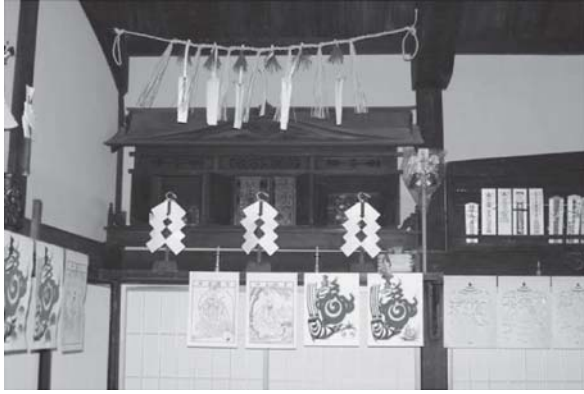


写真5 左から大国主、事代主。星の玉二枚、大漁・万作・千万両・餅・宝船のスカシ



写真6 おさめられたお札

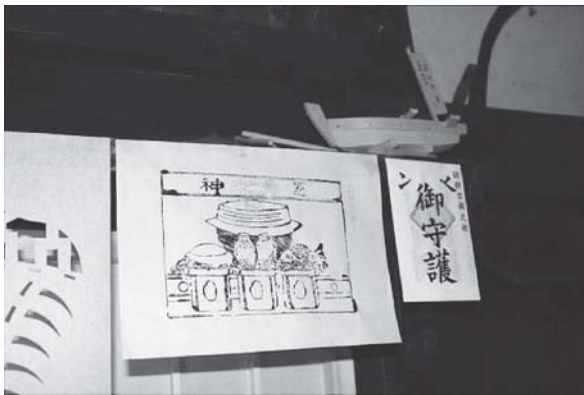


写真7 窯神



写真8 供物台

9日朝夕、11日朝夕、12日朝夕、15日朝夕、19日夜、20日は朝夕（マユダマガユ）にお膳が出る。

元日は菩提寺である興福寺と宗旨は違うが浄念寺、そして八幡神社に参って新年会に顔を出す。浄念寺には、100年前に当家に居候していた「300年インキョ」と呼ばれていた人が浄念寺で弔われているので、拝みに行く。あちらこちらを渡り歩き、あちこちで過ごした年数を足すと300年になってしまうということでその名がついたそうだ。5日にはお寺が年始の挨拶に来る。住職は、日渡のほか、西城（屋号）、小野良組（屋号）など寺が開基のときの檀家5軒に挨拶に行くという。日渡は現在護寺会の副会長をしている。

家の歴史

当家は、私で16代目になる。父も祖父も婿養子であったため、なかなかシュウトオヤとの関係が難しかったと聞いている。祖父が芸達者だったため、父はしょっちゅう歌を歌わされて参ったという。

ももとは、海苔、牡蠣、コウナゴ漁などを家業としていたが、チリ沖地震（昭和35年）の津波があり、その翌年（昭和36年）船を売って漁師を廃業し、工場を始めた。平成23年7月8日で満50年になるので、2月には歌津の柏崎荘で新年会を行った。漁はやめたが、ベッカ（別



写真9 鍾馗様の掛け軸



写真10 箕

家：分家)が高田で船団長をしている関係で、宴席では思いもかけない上席を用意されることが多い。家印は山に力。

ここに飾ってある古ぼけた掛け軸はかけっぱなしなので汚れて判別しにくいが鍾馗様である。あるときアメリカからきた機械で修復し、ようやくここまできれいになった。祖母が小さいときに旅の六部が訪ねてきて、「こちらにある鍾馗様が厄災を祓ってくれている」と語ったと伝えられる。今回も水は鍾馗様の手前までしか浸水しなかった。何となく力になってくれているような気がして大切にしている。